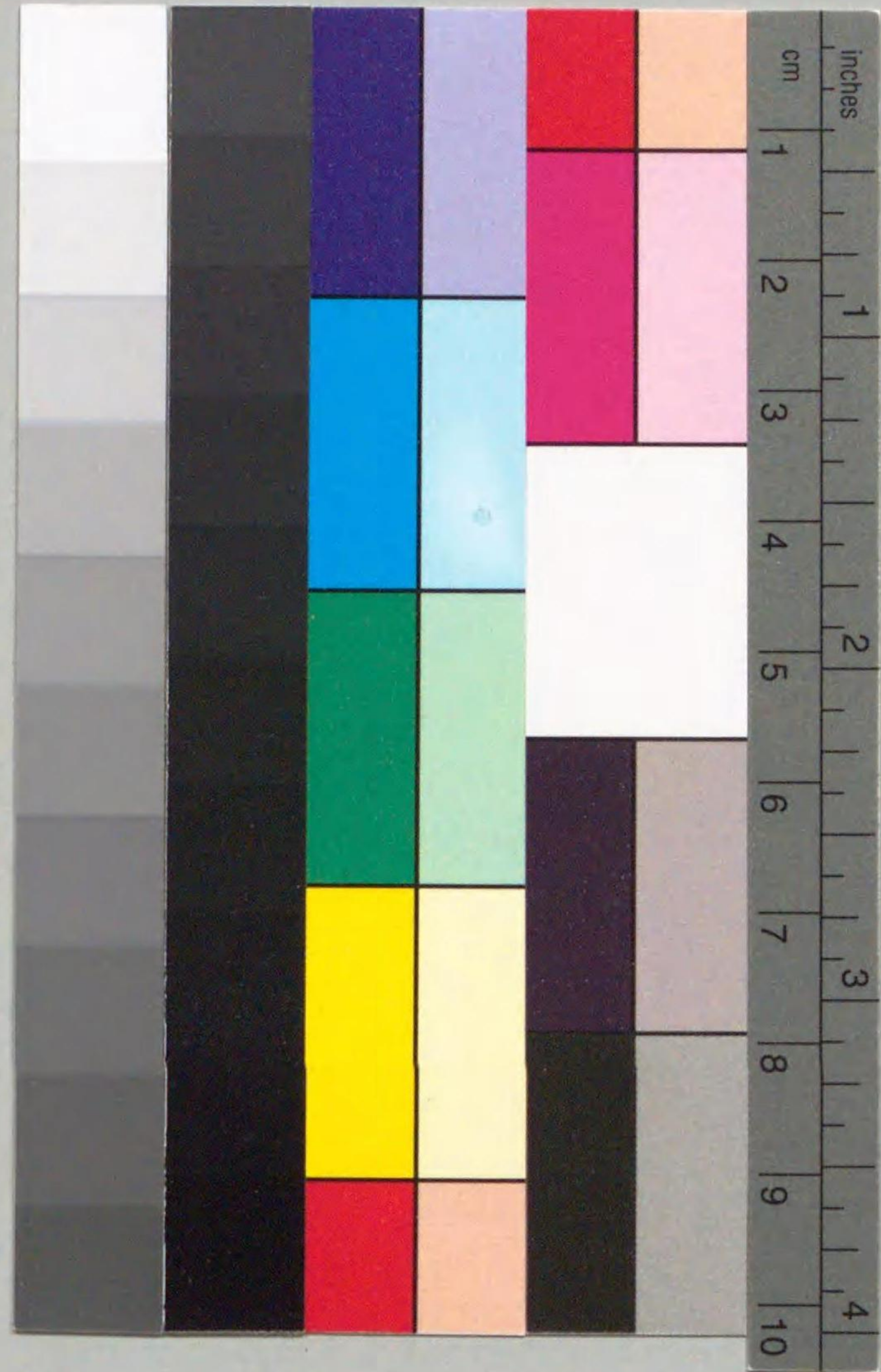




少國民讀本  
滿洲國の歴史と精神

滿洲國通信社編

10 銭



少國民  
讀本

滿洲國の歴史と精神

滿洲國通信社編

誰でもつうせ



吉野町 乾寫真機店  
〇九三ニヨ (ワンホ) リウダガキ

# 滿洲帝國國歌

C 2/4

5 - 3 - | 1 - 0 0 | 2 1 3 1 | 5 - . 0 | 6 - 4 - | 2 - 0 0 |  
 天 地 內 有 了 新 滿 洲 新 滿 洲  
 6 4 2 4 5 | 1 - . 0 | 2 - 2 - | 5 - 2 - | 3 - 1 - | 2 . 3 5 0 |  
 便 是 新 天 地 頂 天 立 地 無 苦 無 憂  
 1 - 6 - | 5 2 3 5 - | 6 - 2 3 | 5 - 1 2 | 3 1 2 - | 5 - . 0 |  
 造 成 我 國 家 只 有 親 愛 並 無 怨 仇  
 3 - 1 - | 3 5 5 0 | 5 - 3 - | 5 i i 0 | 5 - 6 - | 3 - 5 - |  
 人 民 三 千 萬 人 民 三 千 萬 縱 加 十 倍  
 6 - 7 2 | 1 - . 0 | 6 4 5 - | 6 4 5 - | 4 - 2 - | 3 - 5 0 |  
 也 得 自 由 重 仁 義 尚 禮 讓 使 我 身 修  
 6 4 5 - | 6 4 5 - | 4 - 2 - | 3 - 1 0 | i - i - | 6 i 6 i 3 5 |  
 家 已 齊 國 已 治 此 外 何 求 近 之 則 與  
 6 - 5 - | 2 3 5 0 | i - i - | 6 i 6 i 3 5 | 6 - 5 - | 2 - 1 0 |  
 世 界 同 化 遠 之 則 與 天 地 同 流

遠 近 此 家 使 重 縱 人 只 造 頂 新 天 地  
 之 之 外 已 我 仁 加 民 有 成 天 滿 地  
 則 則 何 齊 身 義 十 三 親 我 立 洲 內  
 與 與 求 國 已 修 尚 倍 千 愛 家 地 便 有  
 天 世 界 已 治 禮 也 萬 人 無 苦 無 天 滿  
 地 界 同 化 遠 之 則 與 天 地 同 流  
 由 自 得 也 得 自 由 三 千 萬



少國民  
讀本

滿洲國の歴史と精神

目次

一、建國以前の滿洲	一
二、滿洲事變と建國運動	六
三、滿洲國の成立	一二
四、滿洲國の發展	一七
五、國體國是の奠定	二三
六、その後の躍進	三一
滿洲帝國國歌	目次裏頁
表紙——「國務院遠望」	

一、建國以前の滿洲

——張政權の横暴ぶり——

『日滿一徳一心』といふ言葉がある。この言葉が、一般に使はれ出したのは、滿洲國の建國以來であつて、古いことではない。しかし、この言葉であらはされてゐる、日本と滿洲との關係は、決して新しいものではない。もともと、兩國の關係は、千餘年の昔にさかのぼることが出来るのであるが、滿洲國建國直前の三十年間において、もつとも深く、密接である。

明治二十七・八年の日清戦争で、日本は遼東半島を得たのであつたが、三國干渉によつて、東洋平和のために、涙をのんでこれを支那に返したの

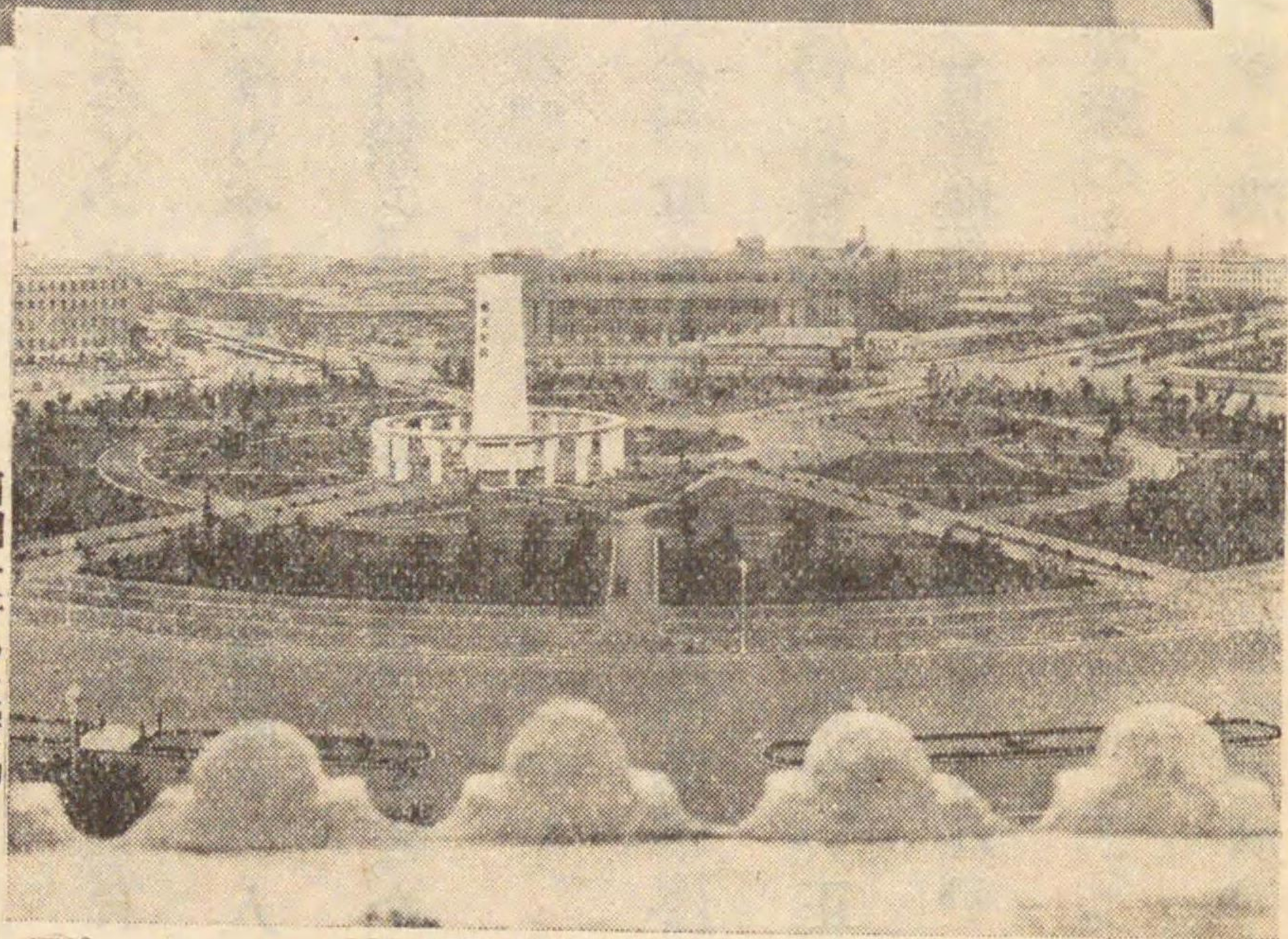
である。次いで、明治三十七・八年の日露戦争の結果、露國が持つてゐた關東州の租借權と南滿洲鐵道とが日本に譲り渡され、更に、大正四年の日支條約によつて、兩國は南滿洲及東部內蒙古に於ける經濟關係を密接にするため諸種のとりきめを行つた。日本は斯様にして滿洲との關係が深くなるにつれ、その經濟開發に全努力を傾注し、今日の樂土滿洲國の基礎を築きつゝあつたのである。

それでは、當時の滿洲は、どんな有様であつたのであらう。いふまでもなく、滿洲の地は、いたるところ天然に恵まれ、鑛産・林産等の資源は、その盡くるところをしらず、廣茫たる原野には農産物・畜産物が豊富で、水産物にもまた事缺かなかつた。従つたまた、國外との貿易も、常に輸出

・・ 新 京 の 街 市 ・・



完全に舗装された三線道路  
大同大街



周圍一帯の大廣場

大同廣場

超過を示してゐたのである。かうした状態であつたから、當然滿洲は富み榮え、世界の列強と肩を並べて劣るところなく、その富強を堂々と世界に誇ることができた筈である。それにもかゝらず、滿洲の政治は亂れ、人民は絶え間ない戰亂に苦しめられ、天災と飢餓とに泣かなければならなかつた。それは、何故であつたか。

當時滿洲は、中華民國の一部ではあつたが、事實上、張家政權の治下に置かれてゐた。かの張作霖が、奉天督軍といふ官に任ぜられたのは、大正五年で、同時に奉天省長となり、更に東三省宣撫使といふ役に任ぜられ、それからといふものは、張軍閥が、滿洲の實際の主權者となつたのである。次いで張作霖の死後、學良が父の遺業をつぎ、滿洲の支配者となつたが、

彼は、領内を保護し人民を安んぜしめる政策を棄て、國民黨・南京政權と結んで自己の安逸をのみ求めた。

また、父の張作霖時代には、幾度か大兵を率ゐて北京に進出駐兵したので、それが度重なるにつれ、滿洲の政治經濟の組織はこはされ、必要以上の軍費の要求は、國民にとつて非常な重荷となつた。かうして、本來豊かに富み榮え、平安であるべき滿洲の地も、軍閥の横暴なやり方によつて、見るかげもないまでに、疲弊させられてしまつたのである。この軍閥張家政權が、人民のうらみの的になつてゐたことはいふまでもないことだ。

しかも、張政權の横暴は、これだけに止まらなかつた。滿蒙の野に、滿洲開發・樂土建設を目ざして、營々と辛苦する日本人に對しても、あらゆ

る不條理を盡して、自ら顧る色もなかつた。かうして、滿洲に眞の樂土をうち建てようと努力してゐた日本人を主たる勢力とするかたまりと、滿洲を自己の野望の餌食として恥ぢない張政權との間には、何れは爆發するであらう不氣味な暗雲がたれこめてゐたのであつた。

## 一、滿洲專變と建國運動

——中心勢力となつた自治指導部——

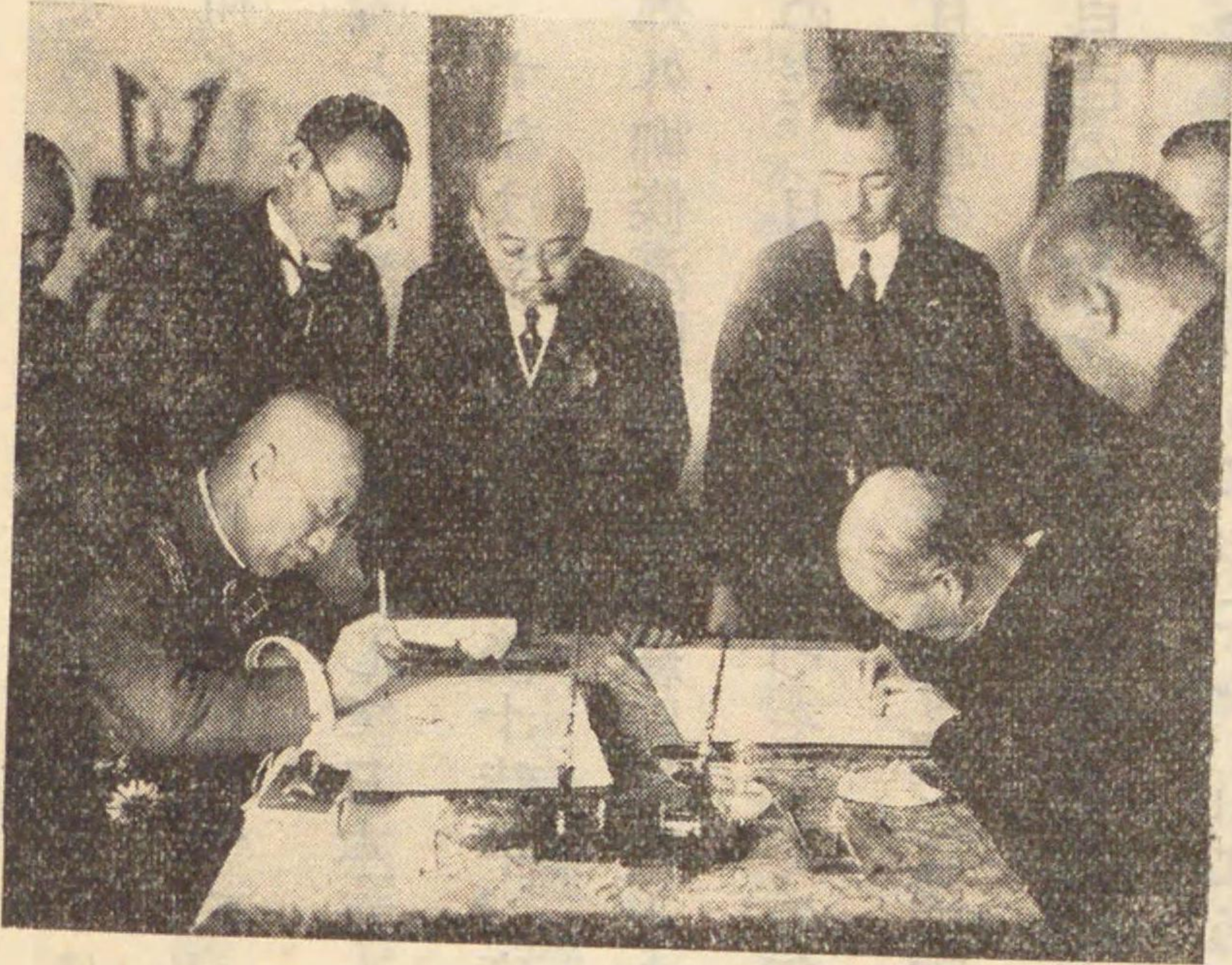
大同元年三月一日の『滿洲國建國宣言』には、冒頭先づこのことにふれ當時の滿洲の實狀が、詳しくのべられてゐる。さうして

「我カ滿蒙三千萬民衆、命ヲ此ノ殘暴無法ノ區域内ニ託スルハ死ヲ待ツ

ノミ、何ソ能ク自ラ脱センヤ。」

とある。このやうに、もはやどうにもならないまでに窮迫した状態は、昭和六年九月十八日の夜にいたつて、突如うち破られた。東洋平和と世界正義とのために、決然として日本がたちあがつたのである。

すなはち、その日午後十時半、度重なる支那の不法なやり方は、奉天の郊外柳條溝附近の鐵道線路爆破となつて、日本軍の勘忍袋の緒を切らせたのだ。日本軍一たびたつや、その行動は神速を極めた。南滿洲の要地は、日本軍の手によつて、瞬く間に清掃され、秩序は完全に保たれたのである。自己の牙城を追はれた張軍閥政權は、九月下旬になつて錦州にたてこもり全滿を再び混亂におとしいれようとたくらんだのであるが、もとより正義



（日五十月九年元同大）景情的史歴の印調書定議滿日

に抗し得る敵のあらう筈がない。皇軍は翌年一月三日錦州を占領し、二月五日には堂々哈爾濱に入城した。かうして、多年滿洲を毒してゐた軍閥は、一舉に滅ぼされたのである。

『建國宣言』に

「手ヲ隣師ニ借リテ茲ニ醜類ヲ驅リ、積年軍閥盤踞シ、秕政萃聚セル地ヲ舉ケ一旦ニシテ之ヲ廓清ス。

此レ天我カ滿蒙ノ民ニ蘇息ノ良機

ヲ予ヘシナリ。」

とあるのは、このことをいふのである。

軍閥の間違った政治に苦しめられてゐた滿蒙住民は、この時とばかり、安らかに自分たちの仕事が樂しめるやうな、新しい國が出来てほしいものだ、願つたのである。さうして先づ、各省の獨立運動が起り、全滿民衆の聲を實現しようとした。だが、これらの運動は、各地に個々別々に起つたものであつて、それだけでは力が弱い。國家としての全體的な動きとなるためには、はつきりした方向が必要であり、これらのものを結びつけるだけの、中心が無くてはならない。その方向を定め、中心となつたものが、自治指導部であつた。



では、自治指導部の方向とは、どういふものであつたか。『自治指導員服  
務心得』の冒頭には、次のやうに書かれてある。

「自治指導部ノ理想ハ、明治天皇ノ偉圖ヲ奉繼シ、眞日本ガ世界ニ負ヘ  
ル大使命ノ第一歩ヲ此ノ因縁深キ滿蒙ノ地ニ下サントスルニ在リ。斯ノ  
聖業タルヤ興亞ノ經綸ヲ通ジテ世界正義ヘ一路直通ス。」

こゝに、早くも新滿洲國の針路は、確立されたのである。すなはち、皇道  
精神の發現としての興亞の大業が、世界正義に通ずるところに、滿洲國の  
大使命が置かれたのである。この自治指導部の部長には、病をおしてたつ  
た故子冲漢氏が任ぜられ、この部長の下に、幾多の青年が全滿に散つて、  
建國の基礎を築いたのであつた。

一方、建國を望みあこがれる民衆の聲は、いよ／＼たかまつて、遂に二  
月二十九日の全滿建國促進運動聯合大會により、建國への全滿民衆の意志  
が決定した。これに先立つて二月十六日、張景惠氏以下の民衆代表が集つ  
て、新國家建設會議を開いた。この會議において、新國家建設が決定され  
その準備についての色々な相談が議せられた。その結果として、翌十七日  
新たに東北政務委員會が結成され、十八日、愈々獨立宣言文が發表された。  
すなはち、獨立の目的は

「王道主義による善政を布き、軍閥排除安民善政・共存共榮・安居樂業  
の三大使命を果すにある。」

と宣言されたのである。次いで三月一日、東洋平和の礎石となるべく、王

道樂土としての滿洲國が成立したのである。そしてこの日、滿洲國政府の名で、先にのべた建國宣言が世界に發表された。

### 三、滿洲國の成立

——記念すべき三月一日——

三月一日は、滿洲にとつて、忘れることの出来ない日である。すなはち三百十九年前（西曆千六百十九年）の三月一日には、清の太祖愛親覺羅が撫順の近くで明の大軍をやぶり、清朝の基礎をつくつた。今また、世界の歴史にかつて見られない王道國家滿洲國の成立を見たのも、三月一日である。

かくて東北四省を含む滿洲は、國の名を滿洲國と呼び、元首として、執政に前宣統帝溥儀氏を戴いた。同時に、國旗には新五色旗を制定し、年號は大同等稱し、國都を長春に奠め、これを新京と改めた。

大同元年三月九日、執政就任式が新しい國都長春に擧げられ、また、同日附で新國家の基礎となる法令・官制が公布され、十日には、國務總理鄭孝胥氏以下の政府首脳部が任命された。次いで十一日に教書が發せられ、窮民の救恤と大赦とが行はれ、更に十二日には外交部總長謝介石氏の名でもつて、世界十七ヶ國の外務大臣にあて、新國家建國の主旨・諸外國に對する方針と態度とを通告したのであつて、こゝに滿洲國は、獨立國としての面目を、内外に向つて明らかにしたのである。

『建國宣言』には、次のやうに書かれてある。

「應ニ即チ三千萬民衆ノ意向ヲ以テ、即日宣告シテ中華民國ト關係ヲ脱離シ、滿洲國ヲ創立ス。」

と。創立といふ言葉ではつきり判るやうに、滿洲國はそれまでの中華民國軍閥政治の延長としてではなく、それらと全く縁を切つた、新しい別個の國としてあらはれたのであり、しかもそれが、三千万民衆の總意として行はれたことを記憶すべきである。こゝに、滿洲國建國の、他に比べものない美しさがある。

それだからこそ『建國宣言』に言はれてゐる

「竊ニ惟フニ、政ハ道ニ本ツキ、道ハ天ニ本ツク。新國家建設ノ旨ハ、

一ニ以テ順天安民ヲ主ト爲ス。施政ハ必ス眞正ノ民意ニ徇ヒ、私見ノ或存ヲ容サス。」

といふことが實現され得るのである。このやうに、天の命ずる所にしたがひ、民を安んずるところに、王道國家の眞面目があるのである。民族協和といふことも、この公明正大な新天地においてはじめて實現出来るのであつて、『建國宣言』には

「凡ソ新國家領土内ニ在リテ居住スル者ハ、皆種族ノ岐視尊卑ノ分別ナシ。」

とあるのである。すなはち、ことさらに分けへだてをすることなく、進んで國內に居住するすべての民族が、打つて一丸となり、協和し、新國家建

設の理想たる王道樂土を實現しようとするのである。以て

「東亞永久ノ光榮ヲ保チテ、世界政治ノ模型ト爲サム」(『建國宣言』)とするのである。

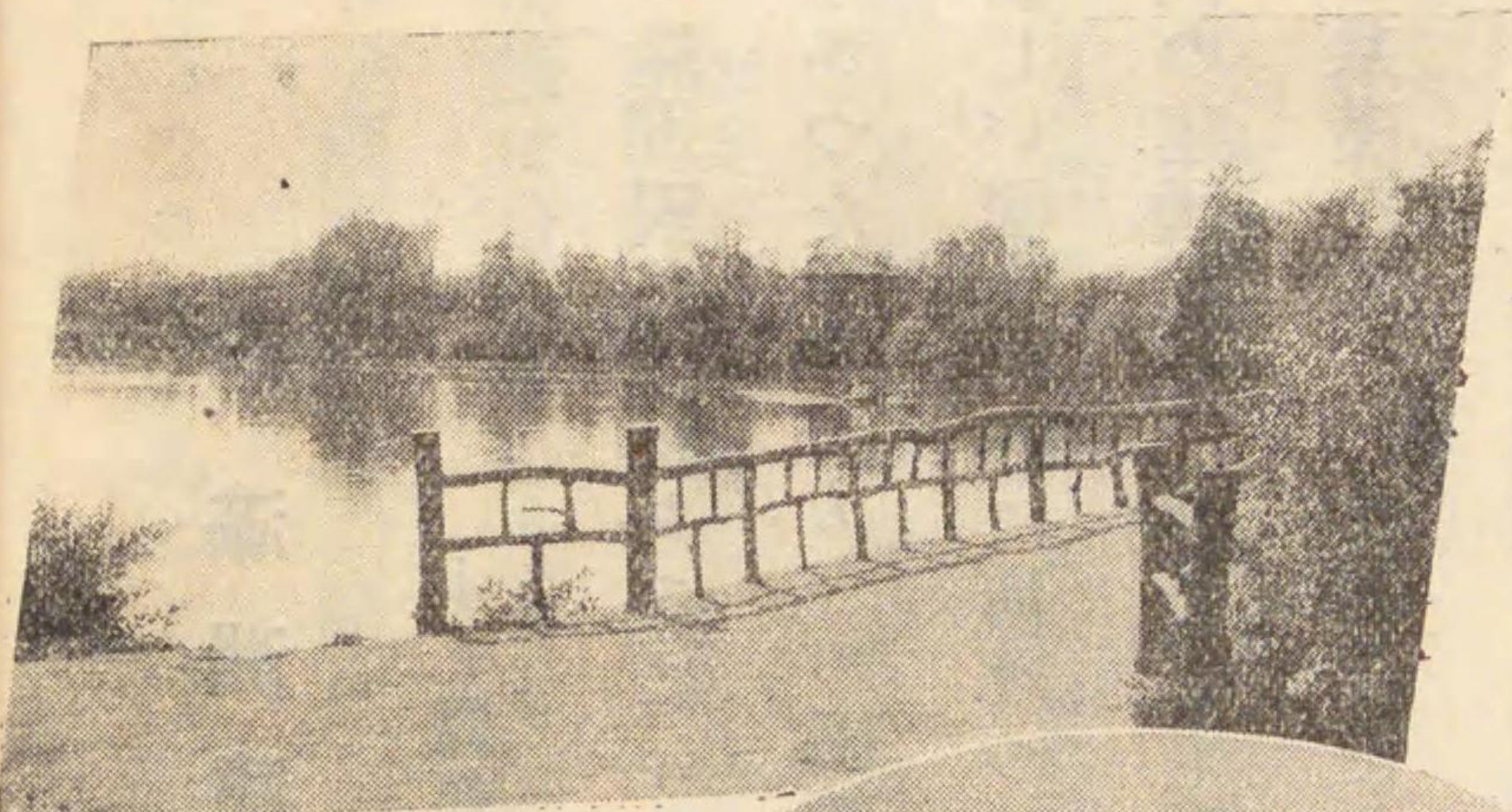
われわれは、かうした建國の大理想が、建國と同時に確立され、展開されて來てゐることを忘れてはならない。今日われわれが、眼前にみる滿洲國の素晴らしい發展ぶりは、實にこの大精神に基いて初めて得られたものであつて、今後もまた、この大精神にしてそこなはれない限り、滿洲國の發展はきはまりないものと、言はねばならぬ。將來の滿洲を擔つてたつべき少國民諸君は、特にこの點に心を注ぎ、いやしくも、この道からそれるやうなことがあつてはならない。

#### 四、滿洲國の發展

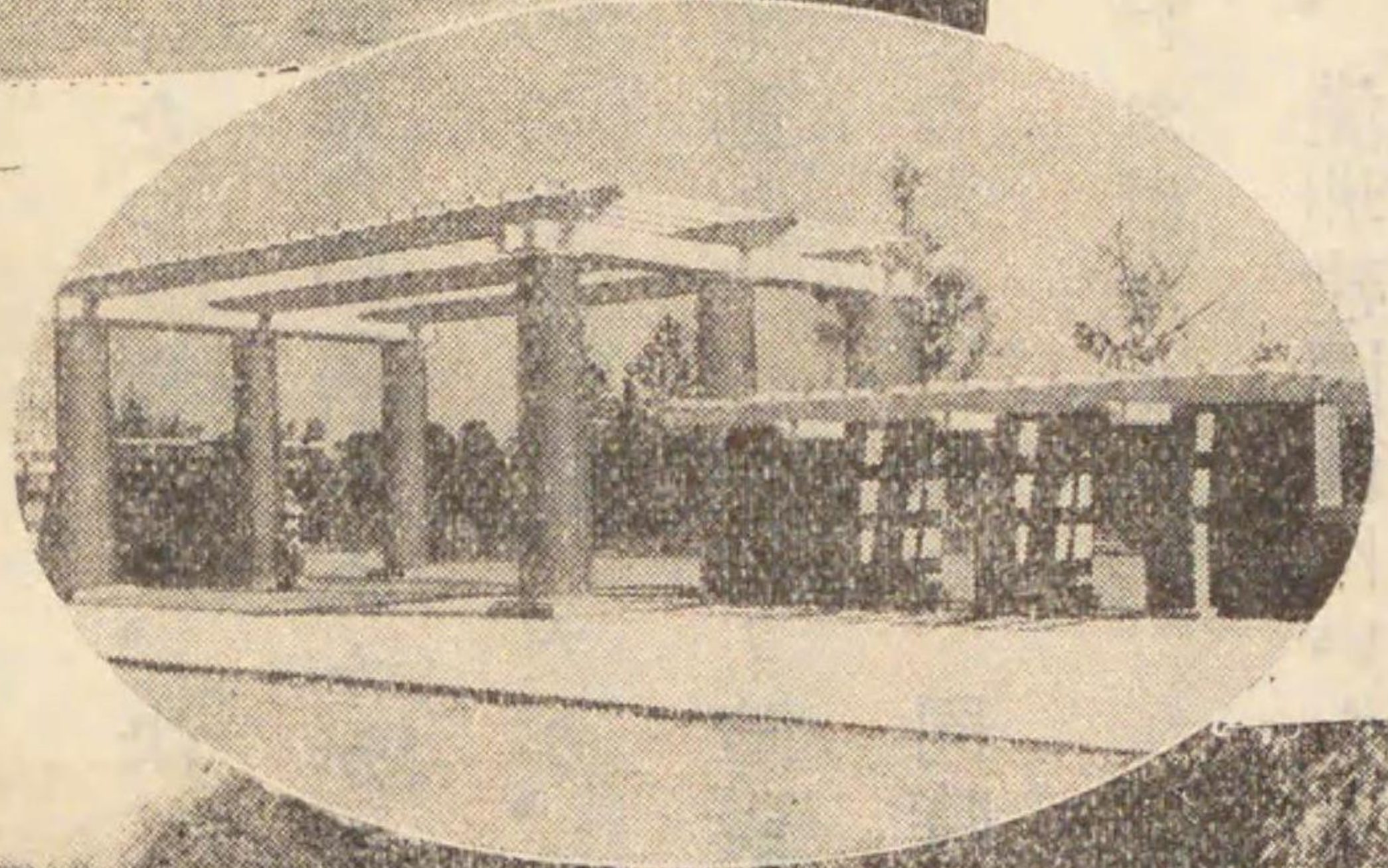
——盟邦日本の學國的援助——

滿洲國が今日あるにいたつた道程は、決して平坦な樂々としたものではなかつた。さまざまの困難な問題が、あたかも天の試練であるかのやうに、新しい國家の前に横はつてゐたのだ。だが、さうした困難艱苦の前に、滿洲の建國精神はびくとも動かず、いつも障碍と闘ふ推進力となつて、國家の基礎を確立するにいたつたのである。同時に、友邦日本の力強い協力があつたことを銘記しなければならぬ。

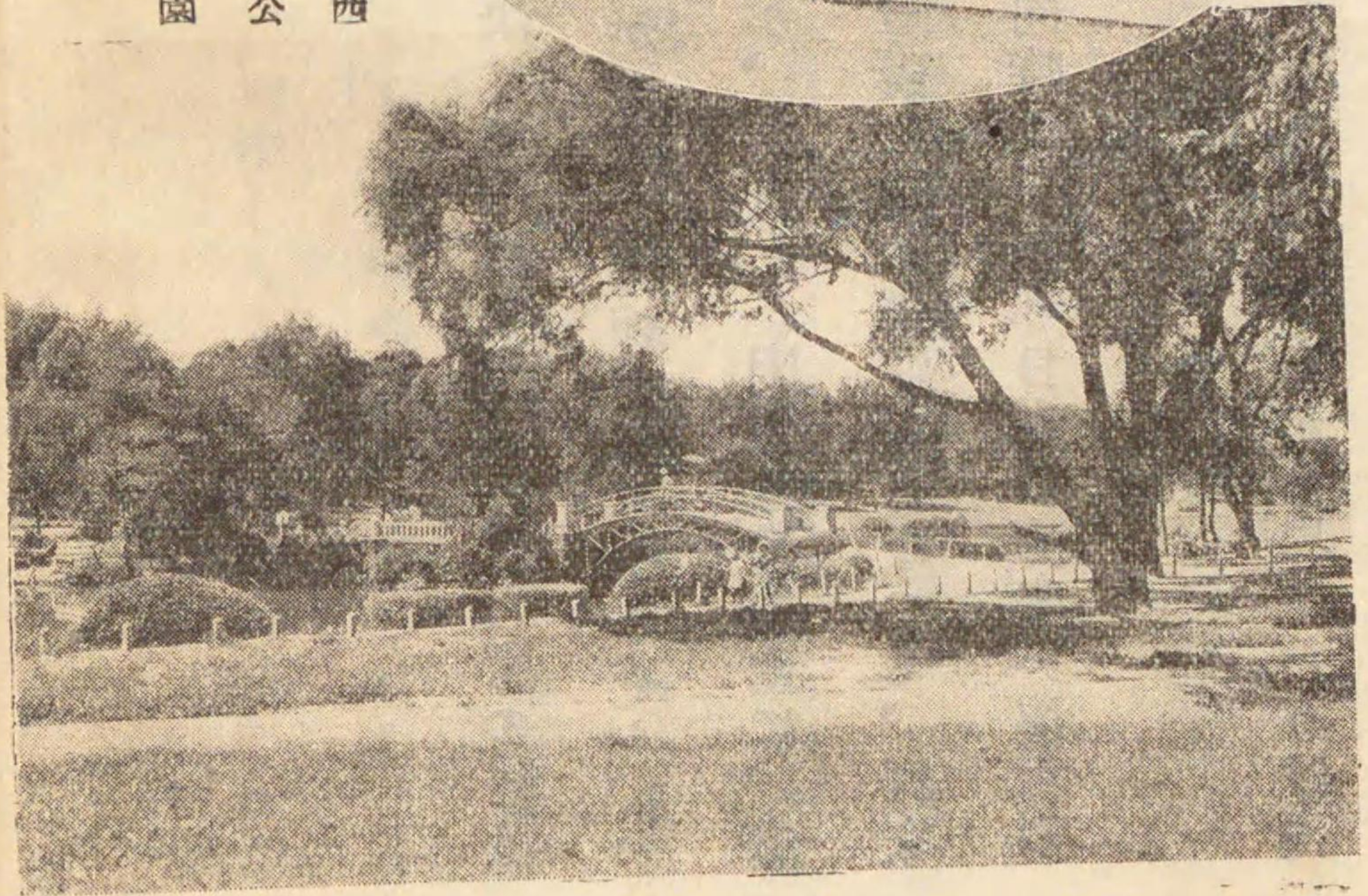
滿洲事變の初めから、滿洲建國後にいたるまで、日本が世界からうけた



大同  
公園



新京の  
公園  
西公園



疑惑や非難は、大變なものであつた。もとより、それは日本の眞意を認め得ない、又は強ひて認めない誤解、曲解に基くものではあつたが、それだけに、日本に對する世界輿論の悪化は、恐るべきものがあつた。しかも、日本は敢然としてたち、斷乎として闘つたのである。日本の意圖するところは、皇道精神の世界への光被であり、それに基づくアジア全體の和平と、樂土建設にあるのである。

そのためには、これまで甚だしく壓迫されてゐたアジア民族の復興が、先づ果されなければならぬ。然しそれは、いたづらに歐米人を排斥したり、わけへだてをすることではない。そんな小さな狭い精神では、大アジア復興などといふことも、かけ聲だけで終るであらう。日本精神とは、世

界を包んで蔽ひ得るだけの廣く大きい精神である。同時に、日本人たるものは、この大精神を自分のものとし、その精神にふさはしい、立派な人間であらねばならない。「自分は日本人である」と言ふとき、それが口先だけであつては、何にもならない。日本人としての、中味が大事なのである。この精神に裏うちされるところに、眞の民族協和は成りたつのである。

滿洲事變の際滿蒙民衆の力となり、建國後、あらゆる周圍の迫害から、若い滿洲國を守り育てた日本の友誼こそ、實にこのやうな精神に基いたものであつて、これを思へば、日滿一徳一心といはれるのも、決して文字の上、言葉の上でだけのことではないことを知り得るであらう。

日本は、早くも大同元年九月十五日、滿洲國を承認してその旨を中外に聲明し、さらに、滿洲國の健全な發達が東亞の和平、ひいては世界平和を保つ基であることを認識し得ない國際聯盟に對し、種々手をつくしたあげく、幾多の犠牲をおしきつて、昭和八年三月二十七日、國際聯盟を脱退したのであつた。『國際聯盟離脱ニ關スル詔書』には、次のやうに仰せられてゐる。

「……今次滿洲國ノ新興ニ當リ、帝國ハ其ノ獨立ヲ尊重シ、健全ナル發達ヲ促スヲ以テ、東亞ノ禍根ヲ除キ、世界ノ平和ヲ保ツノ基ナリト爲ス。然ルニ、不幸ニシテ、聯盟ノ所見、之ト背馳スルモノアリ。朕乃チ政府ヲシテ、慎重審議遂ニ聯盟ヲ離脱スルノ措置ヲ採ラシムルニ至レリ。」  
滿洲國民たるものまた、よくその意を體せねばならない。

かくて、滿洲國は治安の維持において、財政の確立において、或ひはまた産業開發において、早くも建國直後二、三年間で、その面目を一新したが、この間にあつて、協和會の成立とその活動とが、重大な意義を持つてゐる。自治指導部については前に述べたが、滿洲國成立とともに、その一半は官職に就き一半は野に下つて、大同元年七月二十五日名譽總裁に執政を、名譽顧問に關東軍司令官を戴いて協和會を結成した。

では協和會設立の意義が、どこにあるかといへば、協和會は滿洲建國とともに生れ、國家の機構として定めた團體であつて、建國精神を無窮に護持し、國民を訓練し、その理想を實現すべき唯一の思想的・教化的・政治的な實踐組織體である點にある。協和會は、政府に従屬する機關でもなけ

れば、對立するそれでもない。それは、政府の精神的母體であつて、協和會精神の上に形作られた機關が政府であり、建國精神は、政府によつて政治となつて發現し、その思想的・教化的・政治的實踐は、協和會の手によつてなされるのである。こゝに滿洲國の政治の世界に比を見ない特質がある。

## 五、國體國是の奠定

——帝制實施に國礎愈々固し——

建國後の劃期的な發展にともなひ、當然の結果として三千萬國民は、天意によつて執政の帝位につかれんことをお願いひ申上げるにいたつた。政府

も、大同三年一月二十日國務院に重臣會議を開いて、「新國是決定皇極奏請」を議し、萬世にわたつてかはらぬ君主政體をうちたて、國家の基礎を固める新國體を決定し、天命を敬承して皇位に即かれんことを執政に奏請する重大建白書を、滿場一致で議決した。執政はこれをおうけになり、新國是を嘉納された。

で、政府はその同じ日、國務總理鄭孝胥氏の名でもつて、帝制實施の聲明を發表した。そのうちには次の様に述べてゐる。

「今次帝制の實施は、我が滿洲國國運發展の歸結にして、建國の理想と使命とを更に充足高揚し、國礎を益々鞏固ならしめ、以て東洋平和を永遠に保持する所以に外ならず、之を誤りて清朝の復辟となすが如きは建

國の理想と使命とに忠なる政府の斷じて取らざる所なることを聲明に當りて附言す。」

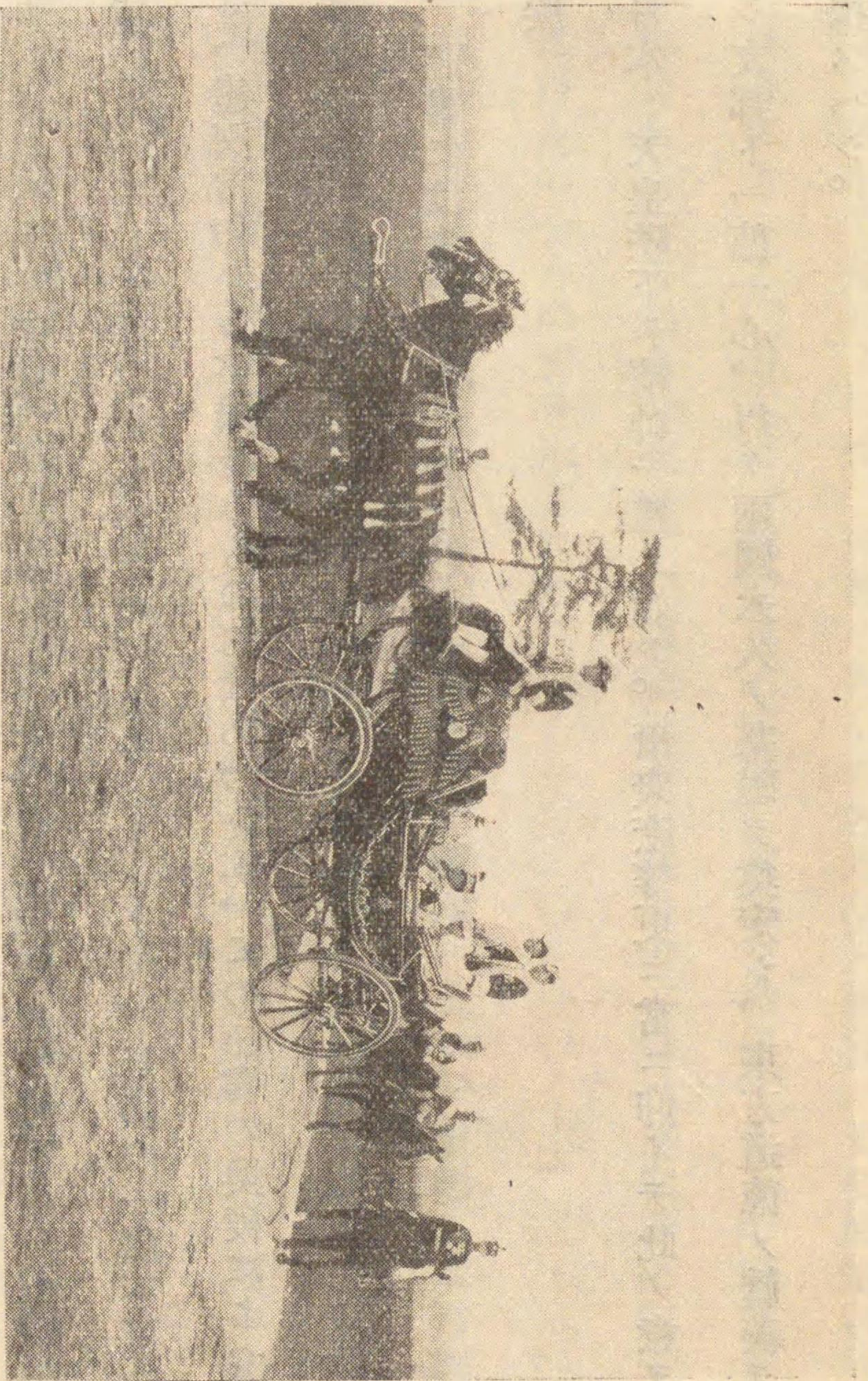
帝制がしかれるやうになつたことは、滿洲國の驚くべき發展のあらはれであるが、同時に順天安民の理想は、ますます明らかに輝き出で、王道樂土建設の使命はいよゝゝ高く掲げられ、東洋平和の確立に一層の力強さが加はつたのである。

帝制の實施とともに、大同は康徳と改元せられ、國號を滿洲帝國とし、國家の組織や法令にも、それにふさはしい改廢や公布をみたのである。更に、康徳元年三月一日、滿洲帝國の歴史に記念すべき即位の大典が、國都新京で舉行され、名實ともに滿洲帝國が確立したのである。



翌康德二年四月、皇帝陛下には、友邦日本を御訪問あそばされ、日滿兩國の上に輝かしい日本皇室との御交驩をとげさせられて、躬を以て兩國の固い契りをお示しになつた。

皇帝陛下御訪日の目的は、第一には、康德元年三月の即位御大典慶祝のため、日本皇室から御名代秩父宮殿下を御さしつかはしになつたに對する御答禮であり、かねて建國以來、陰に陽に滿洲國の成長のために援助しつゝある日本の友誼に對して、皇室を初め奉り、全日本國民に感謝の意を表せらるゝの思召に出でさせられたものである。第二には、かしこくも日滿親善の範を垂れさせ給ひ、御抱懷あそばされる御理想を躬をもつてお示しになることにあつたのである。



下陸帝皇るれさば遊を兵團の式兵觀車同御と下陸皇天

さうして、皇帝陛下は御歸國後、五月二日劃期的な、回鑾訓民詔書を發あらせられた。回鑾訓民詔書によつて、日滿兩國の一體不可分の關係が永遠のものとして奠定せられたのである。もとく、日滿の一體不可分關係は、建國當初から牢固たるものではあつたが、この詔書の煥發によつて、永遠に徳を一にし心を一にする精神的一體であることが明示されたのである。詔書には次のやうに仰せられてゐる。

朕

日本 天皇陛下ト精神一體ノ如シ。爾衆庶等更ニ當ニ仰イテ此ノ意ヲ體シ友邦ト一徳一心、以テ兩國永久ノ基礎ヲ奠定シ、東方道德ノ眞義ヲ發揚スヘシ。

さきに帝制實施によつて、國體の確立をみた滿洲國は、更に回鑾訓民詔書の煥發によつて、日本と一體、東方道德の眞義を發揚するとの國是が明らかにされたのである。次いで、康徳三年七月二十五日、協和會に賜つた勅語には左のやうに説き示された。

「我國忠孝ヲ以テ教本トナシ、仁愛ヲ以テ政本トナシ、盟邦日本帝國ニ倚賴シテ永久渝ラス。其心ヲ一ニシ、其徳ヲ一ニシ、東方道德ノ眞義ヲ發揚シ、世界人類ノ福祉ヲ増進スル、國是奠マルトコロ、天下咸ナ知ル所ナリ。」

かくて、滿洲國政治の根本が明確にされた。教育の淵源もまた回鑾訓民詔書に發するものであること、いふまでもないことである。

このやうに、忠孝を以て教本とし、仁愛を以て政本とする滿洲國の王道政治は、まことに世界に冠絶するものである。中華民國では、古來王道といふ文字がさかんに用ゐられ、又、實踐されてゐるかのやうにも言はれたのであるが、いまだに中國の人民は、王道の恵みに浴することが出來ないでゐる。といふのも、滿洲國の王道と支那の王道とでは、その根本が異なるのであつて、滿洲國の王道政治には、それを貫いて流れるものに、日本の皇道の精神がある。この事實は、畏くも明治大帝の賜つた教育勅語に、

「コレヲ古今ニ通シテ謬ラス、コレヲ中外ニ施シテ悖ラス。」

と仰せられてあるのと、びつたり一致してゐるのである。かくあつてこそ、はじめて日滿一徳一心、精神一體が實現せられるのであり、こゝに、滿洲

國の世界における道義的立場が確立するのである。

## 六、その後の躍進

—重大時局に對する覺悟—

それからといふもの、大滿洲帝國の躍進は、まことにめざましく、建國以來わづかに六年、歴史の流れからみれば瞬く間の出來事にすぎないのに、世界の大多數の國々が、どうかして現状を持ちこたへようとのみ、努力してゐる際、滿洲國では、政治行政機構は改革整備され、財政金融は確立改善され、産業の開發、經濟建設は着々と實現し、治安・國防は搖ぎないものとなつて強化され、教育・社會施設は充實されてゐる。更に、さうし



コネルゼー伊太利總領事と會見する張總理

た全體的な發展は、當然文化の躍進を來してゐるのである。世界の驚異とされるのもまた當然と言はなければならぬ。かうした國內の充實は、外部へも現はれずにはゐない。その第一の現はれは、日本の治外法權撤廢である。このことについては、滿洲國通信社から出てゐる。『少年少女のための治外法權撤廢のお話』に、くはしく出てゐるから、もう諸君も御承知であらうと思ふが、日本が、多年

努力を注いでゐた滿鐵附屬地の行政權を滿洲國に譲り、治外法權を撤廢したことは、日本の滿洲國に對する根本方針のあらはれであるとともに、滿洲國の健全な發達を證據だてるものであるのだ。同時に、それは、日滿一徳一心のはつきりした表現であり、且民族協和の實現を意味するものである。

こうして、われわれ日本人も、名實ともに滿洲國を構成する分子となり、滿洲國の歴史に劃期的意義を與へた。

更に、それまで滿洲國の好意でもつて、諸外國にも治外法權的な待遇をしてきたのであるが、日本が進んで治外法權を撤廢した以上、こうした諸外國に對する待遇も廢止されることになつた。

これは、現在滿洲國にある諸外國の權利だとか利益を奪つてしまふといふことではなく、それらには、適當な考慮がはられるのであつて、つまり、滿洲國の國際的地位の向上を意味するものであるのだ。

この治外法權撤廢條約の日滿兩國調印式は、康德四年十一月五日にとり行はれ、十二月一日から實施されたのである。

次には、諸外國の滿洲國承認である。治外法權撤廢實施に先立つ十一月二十九日、歐洲政局の動向を支配してゐる伊太利が滿洲國の承認を宣言した。十二月二日には、西班牙の人民戰線政府に對抗するフランコ政權と滿洲國とが、お互ひに承認し合つた。越えて康德五年すなはち今年の二月二十日、獨逸も滿洲國を承認するに至つた。さらにその他の各國も相ついで

滿洲國を承認しようとする動向を見せてゐる。このやうにして、滿洲國に對する世界各國の見方は、承認するとしないとを問はず、著しく變つて來たのである。これは日本の滿洲國に對する積極的な援助が、單に自分のためをはかる手段ではなくて、東洋永遠の平和確立のためであるといふことを、世界各國が次第に認めて來たのであり、同時に、滿洲國自身の充實發展がそれを裏書きしてもゐるからである。更に、今次の支那事變がもたらした大きな影響をも、忘れてはならない。

今度の事變において、日本の目的は何處にあるかといふと、支那の悪い政治の根元をなしてゐる國民黨と、武力をふるつて自分たちの都合の良いやうに國民をいぢめてゐる軍閥とをやつつけ、更に、これら國民黨・軍閥

の間にわりこみ、暴威をふるつてゐる共産黨—コミンテルンの赤い魔の手を追拂つて、さうした二重三重の苦しみから、支那の人民を助けださうとするのである。さうして東洋の國々が手を取りあつて、東洋本來の精神にのつとり、正しい政治による樂土をうちたてようとするのである。さうしなければ、東洋の平和は斷じて望むことが出來ないのであり、東洋の平和が確立しなければ、世界平和もまた期し得ないことは明らかだ。

このやうに、支那事變における日本の目的の達成如何は、日本にとつてばかりではなく、更に東洋だけの問題でもなく、實に世界全體の問題である。だから事變の當初から、この事變が第二の世界大戰にひろがるかもしれないとの心配があつた。

つまり、もし世界の強國たちが、日本の眞意を認め得ず、日本は自分勝手な侵略のための戦争をしてゐると判断したならば、當然日本は世界を對手としなければならなかつたのだ。だが、戦局の進展は、着々として皇軍の威武と規律とを示し、日本の眞意がどこにあるかを知らしめ、世界防共陣に重大な礎石を置くとともに、コミンテルンの赤化陣に大動搖を與へたのである。今や世界防共の根幹は、伯林—羅馬から東京に結びつき、新京につながり、サラマンカ（フランコ政府の所在地）を加へ、最近ではウインを入れ、更にどこまでのびるか、恐らくは世界を包含するに至るであらう趨勢にある。これこそ、今次支那事變が持つ重大な世界的意義でなくて何であらう。

日滿一徳一心の關係にある滿洲國が、この事變の世界的意義を反映せず  
 にゐない。こゝに滿洲の國內充實と、その國際的地位の向上とが、世界に  
 とつてどれほど重要なものであるか、わかるのである。われわれ滿洲國民  
 の一人々々が、その覺悟と決意とを新たにし、強固にしなければならぬ。  
 近き將來の滿洲國を背負つてたつ、少國民諸君の責務もまた、極めて重く  
 且大きいのである。この滿洲國を、より充實させ、一層發展させるために  
 は國民のすべてが、建國の精神を振起し建國の大理想の達成へと自分自身  
 を鍛へて行かねばならぬ。さうして、少國民諸君は、よく學びよく遊び、  
 身心の鍛錬に意を注がねばならない。それが諸君の最大の仕事である。  
 目前の課業をうちすて、かへりみないやうでは、大局にたつ仕事は出來な

い。ただ専心、諸君の學業に勵むことが、時局に對する諸君の貢獻になる  
 のである。さうして、諸君が日本國民であるとともに、また滿洲國民であ  
 ることを寸時も忘れてはならない。

この小冊子は、そのために書かれたのであつて諸君のために少しでも役  
 にたつことがあれば、筆者にとつてこれほど嬉しいことはない。どうか、  
 そのつもりで読んでいただきたい。

滿洲讀本

治外法權撤廢はどう響く……………一〇錢  
 裸にした赤魔……………五錢  
 星野總務長官の獅子吼……………五錢  
 治外法權撤廢のお話(兒童用)……………五錢  
 支那赤化と次に來るもの……………一〇錢  
 土地制度と整理の話……………一〇錢  
 街村制度早わかり……………一〇錢  
 滿洲の産業革命……………一〇錢

康徳五年三月二十五日 印刷  
 康徳五年三月二十八日 發行  
 少國民 讀本 滿洲國の歴史と精神

定價 十錢  
 (郵資 二分)

發行人 新北京安路一〇二 松本於菟男  
 編輯人 新北京安路一〇二 瀨沼三郎  
 印刷人 奉天商埠地聲宣里 關真  
 印刷所 奉天工業區四馬路 興亞印刷局  
 發行所 新北京安路一〇二 滿洲國通信社  
 賣捌元 奉天千代田通四〇(馬路邊) 滿洲圖書文具株式會社  
 轉賬儲金新京四五二番

畫報

斯民

譯對滿日

一個月二回發行  
 送料共二十七錢



內外時事を  
 網羅する  
 教養と娛樂の  
 好讀物

滿洲國通信社發行

繪畫

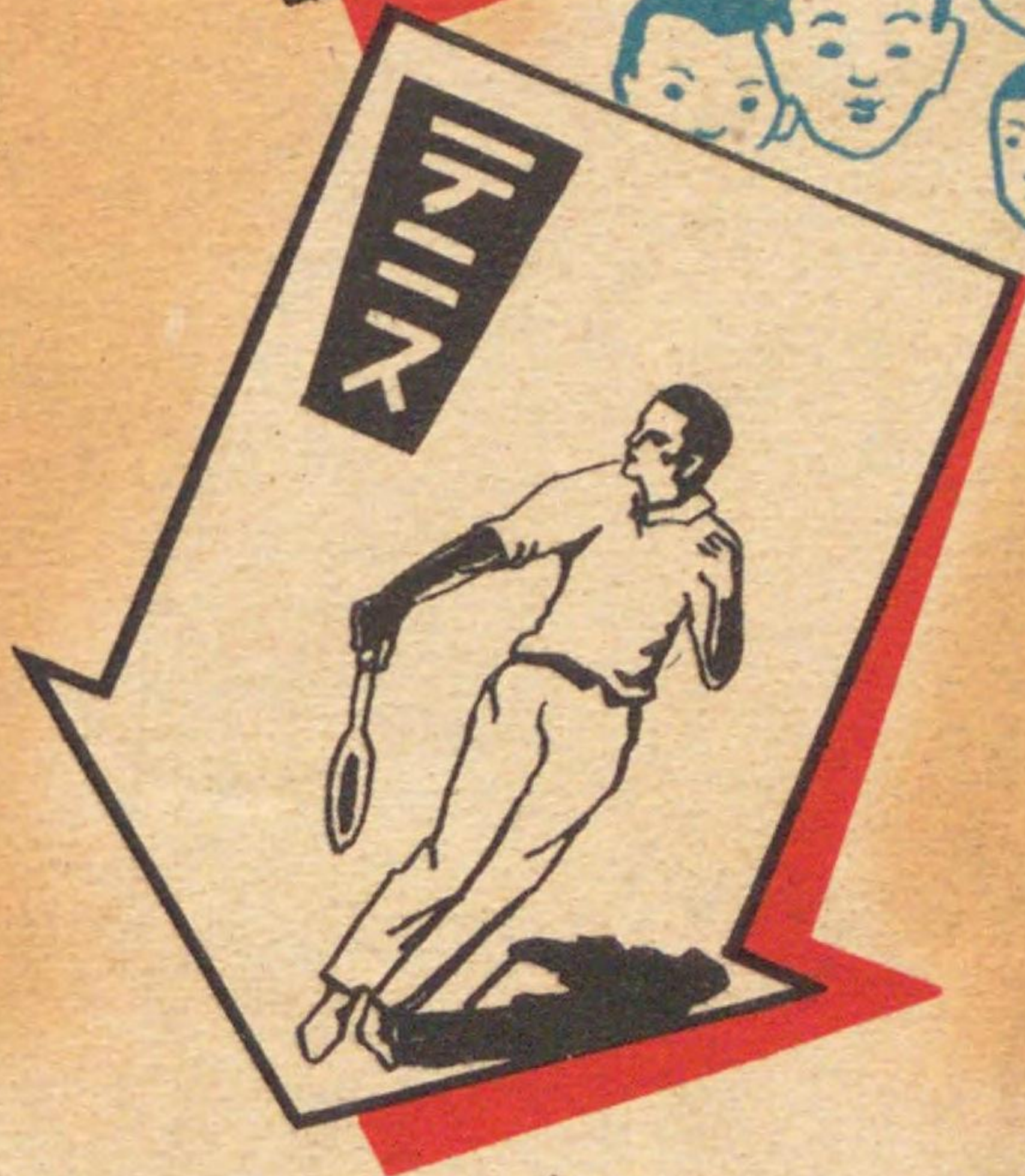




皆さん！ 私達は忠良なる日本  
臣民であると同時に満洲國民でも  
ある譯です。  
將來の日本と満洲國を背負つて行  
くのは私達の名譽であります。



私達は仲良く **スポーツ** に依つて  
身心共に強健にして  
非常時に備へなければなりません。



本店  
奉天春日町五  
電話 3-2136

SPORTING GOODS  
**STAR**  
スター運動用品合名會社

支店  
新京吉野町二丁目  
電話 3-2132